

# ジェンナー伝

小酒井不木

青空文庫



いまからおよそ五十年前のことです。英国南部のバスという  
 市まちで、ある夜盛せいだい大な晩餐会ばんさんかいが開かれました。

集まったものは、政治家、実業家、医師、軍人など数十人、い  
 わゆるその市まちおよびその付近で、名をあげている人ばかりであり  
 ました。当時まだ電燈は発明されておりませんでしたから、いく  
 本かの美しい装そうしよく飾しよくをほどこした銀色の燭しよくだい台だいが、テーブル  
 の上に立て並べられ、皎々こうこうたる光のもとにいと静せいしゆく肅しゆくに、  
 食事がすまされました。

食後人々はテーブルをかこんだまま、紅茶こうちやをすすりながら、いろいろの話にふけりました。と、いつのまにか、すみの方で議論ろんめいた口調で話すものがありましたので、一同は、言いあわせのように、口をつぐんで、その議論ぎろんに耳かたむを傾けました。

「無論むろん、私は炎わたくほのおの中の方が熱いと思います」とひとりの紳士しんしがいきました。

「そうじゃありませんよ。やっぱり炎を少しはなれたところの方がかえって熱いですよ」と、他の紳士が反対しました。

紳士たちは、燭しよくだい台たいに波うって燃えている蠟燭ろうそくの炎をながめながら、その炎の内部が熱いか、あるいは炎をはなれた少し上のところが熱いかを論ろんじあっているのであります。

人々は、興に乗じて口々に賛否両説を吐きました。炎の中が熱いというもの、炎の少し上のところが熱いというもの、いずれもほとんど同数の賛成者を得て、なかなか解決がつきません。それぞれいろいろの理屈を考へだして自説を主張しましたが、だれも、いずれが正しいか、審判をあたえるものはありませんでした。

先刻から、賛否いずれともいわなかった、年のころ二十五、六歳の小柄な紳士は、そのとき突然立ちあがって、「みなさん」と叫びました。

人々は、ぱったり議論をやめて、一斉にその紳士を見つめました。

すると、かれは、だまって、前にある一本の燭しよくだい台たいをひきよせ、右手の指を、いきなり、蠟燭ろうそくの炎の中につきさしました。

一秒、二秒。紳士はおもむろに指を引きました。

一同はあつけにとられて、ふしぎな芸に見いました。

紳士はそれから、ふたたびその指を、炎の少し上に近づけましたが、近づけるやいなや、

「熱ッ」

と、小声でいって手を引きました。

「みなさん」と、青年紳士せいねんしんしは、につこりわらいました。「これ

で、どちらが熱いかおわかりになりましたでしょう」

こういって、やおら席につくと、われるような拍手はくしゅが起こつ

て、人々は口々に、その紳士の機知きちを賞讃しょうざんしました。

そのあくる日のことです。

バスの市まちから少しへだたったパークレーという町に住んでいるこの青年紳士のところへ、ひとりの中年の紳士がたずねてきました。

この青年紳士は、客を見て、

「おや、昨夜はいろいろ失礼いたしました。どこか、お悪いのですか」とたずねました。

この青年紳士は医師だったからです。

「いえ」と、客は答えました。「私はご承知のとおり、インドの植民地と関係のあるものですが、昨夜のあなたのお知恵ちえと決断けつだん

りよく

力とに感心して、ぜひ、植民地へいって、かの地の同胞<sup>どうほう</sup>たちを助けてやっていただきたいと思い、おうかがいしたのでございます。俸<sup>ほうきゆう</sup>給<sup>きゅう</sup>はいくらでもおのぞみどおりだしますから、どうか二、三年、あちらでご開業ねがえますまいか。植民地では、よい医師がないので、みんなが本当に困<sup>こま</sup>っております」

青年医師は客の語るのを、つつましやかにきいておりましたが、このとき、きつぱりいいました。

「そのご親切はありがとうございますですが、私はこれから一生<sup>しょうが</sup>涯<sup>い</sup>、故郷<sup>こきやう</sup>をはなれない決心をいたしました。私はこの土地で生まれ、早く両親を失って、兄<sup>にい</sup>さんのおかげでそだち、ロンドンへまで学問にやってもらって、どうやら、一人前の医者になつて



帰つてきました。そうしていまは兄さんに同居させてもらつてい  
 るのですから、兄さんの生きておられるあいだは、ここを動きま  
 せん。たとえまた、兄さんの百年の後においても、この美しい景  
 色しきをもつた故郷こきようをどうして見すてることができましよう。翠すいり  
よくの樹きにつつまれた山、紺碧こんぺきの水をたたえた谷。春がくれば  
 錦にしきをかざる牧原、秋がくればたわわにみゆる果樹園かじゆえん。このよう  
 にめぐまれた土地は、世界のどこにもないと思ひます。せつかく  
 のおぼしめしですけれど、インドゆきはおことわりしたいと思ひ  
 ます」  
 頑がんとして動く気色もありませんでしたので、客は失望して帰り  
 ました。

読者諸君！ この、機知に富み、故郷を熱愛する青年医師はそもそもだれでありましょう。これこそ、後に種痘法を発見して、人類の恩人とあおがれるにいたった、わがエドワード・ジェンナーその人であります。

## 二

みなさんは、風呂にはいったとき、きつと、自分の二の腕についている三つ四つの、種痘のあとに注意したことがありますよ。むろん、風呂にはいるたびごとに注意する人はありますまいが、この種痘がいったいなんのためにほどこされたものであるか、

考えてみたことがありますか。自分で考えたことはなくとも、お父さんやお母さんから教えてもらったことはあるでしょう。

種痘しゅとうはいうまでもなく、おそろしい天然痘てんねんとうという病気を防ぐためにほどこされるのであります。ところが、いまでは、種痘のために天然痘というおそろしい病気にかかるものが非常に少なくなつたので、天然痘のおそろしさを知っている人はいたつて少ないのであります。もし天然痘のおそろしさを知り、天然痘にかつた患者かんじやの身体のものすごさを一目でも見たならば、本当に、種痘法を発見した人をおがまずにはいられなくなるのであります。ですから、ジェンナーの伝を書くにあたっては、どうしても天然痘てんねんとうのおそろしさを述べておかねばなりません。多分みなさん

はペストやコレラのおそろしきを知っておられるでしょう。種<sup>しゆと</sup>

痘法<sup>うほう</sup>の発見されなかつた時分には、天然痘は実にペストやコレ

ラよりもおそれられたものであります。いかなる階級の人も、上<sup>かみ</sup>

はお公卿<sup>くげ</sup>さまから、下<sup>しも</sup>はいやしい民にいたるまで、天然痘の病原

体は、なんの容赦<sup>ようしゃ</sup>もなくおそいかかりました。一たび痘瘡<sup>ほうそう</sup>

(昔<sup>むかし</sup>は天然痘のことを痘瘡といいました)がはやるということが

伝わると、人々は愕<sup>がくぜん</sup>然として色を失い、ことに子供<sup>こども</sup>を持つ親は、

ぶるぶるとふるえたものであります。

それもそのはずです。十人痘瘡にかかれば三人や四人はかなら

ず死んでしまいました。たとえ治<sup>なお</sup>つても、あるいは眼がつぶれた

り、あるいはあばたが残つて、一生<sup>しょうがい</sup>涯、その人はいやな思い

をしなければなりません。ことにそれが女の子であると、成長の後はおよめさんにもらつてくれる人が少ないのでしたから、女の子をもった親は、ことさらにおそろしがったものです。

なかんづく、病中の患者かんじやのありさまは、目もあてられぬほど、いたいたしいものです。高い熱がでて苦しむうちは、まだよいとして、全身に、すき間もなくふきでものがでて、それが膿うみをもつて黄色に変じますと、まるであの菊人形きくにんぎようのように……きくならば美しいですけれど、それがうみをもった黄色のできものでおわれた有様ありさまを想像してごらんなさい。きつと背せすじに冷たいものが流れるであります。さらにそのふきでものが乾かわくときは黒赤色に変じますから、全身はあんの中へころがったようにな

り、顔はおはぎを見るようで、どこに目があるやら鼻があるやらさっぱりわからないのであります。

このおそろしい病は世界のいずこの国にも流行してときには一カ年に何百万という同胞どうほうを失った国もありました。日本でも古くからこの病が流行し、どうしておこるかわからぬので、疱瘡ほうそうをつかさどる神さまがあつて、その神様がいかつて疱瘡をはやらせになるから、疱瘡にかからぬようにするには、疱瘡神ほうそうがみをおがめばよいといつて、戸こごとに祭つたものであります。通常疱瘡神として住吉すみよし大明神だいめいじんを祭つたものでしたが、いくら住吉大明神を祭つても、疱瘡は依然いぜんとしてその勢いをたくましゅうしたのであります。

このおそろしい病気も、いまは、種痘しゅとうによつて、完全に防げるようになりました。疱瘡神ほうそうがみを祭らなくなつても、種痘をさえほどこせば、たとえときどき天然痘てんねんとうが流行しても、少しもおそれることなく暮くらせるようになりました。そうして各国で、年々何十万という人の生命が救われることになつたのであります。

しかも、このとうとい種痘法は、たったひとりの力で発見されました。なんとみなさん、風呂ふろへはいつて、二の腕うでの種痘しゅとうのあとをみたならば、人類の一員としてわがエドワード・ジエンナーに感謝せざるを得えないではありませんか。

これほどとうとい種痘法しゅとうほうのことですから、それが決して、容易なことで発見されたものとは、みなさんも思わないでしょう。

いかにもそのとおりです。ジェンナーが、種痘法を発見するまでには何十年という長いあいだの苦心がついやされたのであります。

ジェンナーは、一七四九年五月十七日に、前記のバークレーといういなか町の、ある牧師の三男として生まれました。八、九歳さいの時分から、いまでいえば、理科が非常に好きでした。その地方は化石がたくさんでますので、かれはそれを拾ひろってきては、部屋へやのたなにならべて分類しました。また、りすの巣すを集めたり、めずらしい植物を採集さいしゅうしてきては、兄さんたちにその名をきい



て、たくわえておきました。

小学校を卒業すると、かれはサドベリーという町のある医師のところへ書生として住みこみ、医学を勉強して、後には代診だいしんをつとめました。かれは非常に勉強家でしたが、音楽や詩文をこのみ、ひまさえあればバイオリンをひいたり、ふえをふいたり、また、詩を作りました。非常に想像力が強くて、いわゆる一をきいて十をさるとする風でしたから、先生も非常に喜んでかれを教育したのであります。

かれが代診をやっている時分のことです。ある日、いなかからひとりの女患者おんなかんじやが診察を受けにきました。職業しよくぎようをたずねると、

「わしは、牛うしの乳ちちをしぼって暮くらしていますだ」と、いなか言葉で答えました。

その地方は牧畜ぼくちくがさかんで、住民は多く牛を飼かい、したがって女たちは搾さく乳にゆうに従事じゆうじしていたのであります。

ジエンナーはそのときまだ二十歳さいにならぬ青年でしたが、ていねいに診察しんさつしてから、

「おまえさんは熱がある。多分風邪かぜだと思うが、いま世間では瘡うそがはやっているから、気をつけねばいけませんよ」といいました。

「瘡瘡なら、わしは心配しなくてもよろしいだ」と、女は言下に答えました。

「え？　なぜ？」

「わしは、このあいだ、牛の疱瘡が、これこのとおり手にうつりました。ですから、もう疱瘡にはかかりませんて」

こういつて女は、手の甲ここうの、牛の疱瘡にかかったあとを見せました。

ジェンナーは不審ふしんに思いました。乳ちちをしぼる女が牛の疱瘡ほうそうにかかって、手にできものをつくることは、よく知っていましたけれど、牛の疱瘡にかかったものが、人間の疱瘡にかからないということを聞いたのははじめてだったからです。

「でも、牛の疱瘡ほうそうと人間の疱瘡とは性質たちがちがうではないかね」とジェンナーはたずねかえしました。

「性質がちがうか、どうだか、わしは知りませんが、わしひとりではなく、みんながそういつていますだ」

このとき、ジェンナーの頭に、ある考えがひらめきました。そうだ、乳をしぼる女がみんなそういうことをいつていとすれば、まんざらうそではないであろう。もしそれが真実だとすれば、牛の疱瘡を人間にうつせば、もはやあのおそろしい疱瘡にかからないようにすることができないではないか。……みなさん、後にわが人類を救った種痘法なるものは、実にこの瞬間に考えだされたものであります。

このことがあつてから、ジェンナーは、たびたびその地方の搾乳婦にあつて、いよいよ先日のおんなかんじやの女患者の言葉が真実である

ことをたしかめました。牛の疱瘡ほうそうは非常に軽いもので、人間にうつったときも、うみのついた部分に、一つ二つのできものができただけでしたら、軽い牛痘ぎゆうとうのうみをうえて、あのおそろしい疱瘡を防ぎ得るようになったら、どんなに人類のためになるか知れない。なんとかして自分一代には、この予防法を実行したいものだ、ひそかに決心を定めたのであります。

かれはある日、先生にむかって自分の考えを述べました。すると、先生は、

「いなかの女のいうことなどあてになるものか」といつて相手になつてくれませんでした。

そこでかれはその地方で開業している他の医師に自分の考えを

うちあげました。すると、その医師は、

「きみ、牛と人間とを同日に談じてはいかぬよ」と、あざけるようにいいました。

その後、だれに告げても、みんなこのように、本気になつて相談にのつてくれませんので、ジェンナーはもう、だれにも話さぬことに決心しました。

かれこれするうち、ジェンナーは二十一歳さいの春を迎えむかました。

いなかでは思う存分ぞんぶんの修行ができませんので、かれはロンドンへでて、当時外科医として、第一人者に数えられていたジョン・ハンターはかせ博士のもとに弟子入りをしました。このハンター博士は気の短い人ではあるが、非常にすぐれた学者で、当時四十二歳さいであり

ましたが、ジエンナーの温順な性質がすっかり気に入って、弟子でしというよりもむしろ友ともだち達あつかいにしてかわいがりました。

ハンター先生の教えを受けるにしたがつて、ジエンナーは先生が尋じんじょう常の医学者でないことを知り、先生ならば、自分が年来いだいている考えに賛成してくださるにちがいないと思ったので、ある日、ジエンナーは、

「実は先生、これまで、だれに話しても、せせらわらつて相手にしてくれませんが、先生ならばきっと、私わたくしの考えにご同意くださるだろうと思います。私の地方では牛の疱瘡ほうそうにかかったものは天然痘てんねんとうにかからぬといういいつたえがございます。その後、私は注意して、乳ちちをしぼる人たちにききました、どうやらそれは

本当のようであります。そこで私は、牛の疱瘡を人工的に人間にうえたならば、おそろしい天然痘を予防して、人類を救うことができると思います。先生はこの私の考えを、どうお思いになりますか」と、返答いかにと、おそろおそろるつげました。すると、「おお、そうか？」と、ハンターは、言下に答えました。「それは本当か、そういう事実があるのか。それは実にすばらしいことを考えたね。大いに研究するのだね。考えまよつては何事もらちがあかぬから、機会があつたら、実際にやってみることだね。だが、人間の生命にかかわることだから疎漏そろうのないようにやりたまえよ。何事も辛抱しんぼうが肝腎かんじんだ。根気よく目的にむかつて進みたまえ」



これをきいたジェンナーは、目に涙をためて喜びました。ハンター先生のこの一言は、どんなにかジェンナーをはげましたことでしょう。世に「知己」という言葉がありますが、ハンターこそはジェンナーのよき知己であったといわねばなりません。

その後ハンター先生はジェンナーのこの考えを他人にも吹聴してきかせました。そうして、おりあるごとに、ジェンナーに向かつて、

「まよわないでやってみたまえ、辛抱して疎漏のないように」と、例の激励の言葉をくりかえしました。

かくて三カ年、ジェンナーはハンターの薫陶を受け、いよいよ郷里へ帰って開業することになりましたが、わかれるときに

も、ハンター先生は、例の激励げきれいの言葉をあたえました。

#### 四

さてジェンナーは郷里へ帰るなり、すぐに材料を集めにかかるうとしましたが、いざ開業してみると、ロンドン帰りのお医者様だといので、患者かんじやが門前に殺さつとう到し、寸暇すんかもない有様ありさまとなつてしまいました。かれは患者に対して、非常に親切しんれいでして、重病患者などは、その家に寝ねとまりして診しんりよう療りように従じゆうじ事するといふ風でしたから、またたくまに四、五年の月日を送つてしまいました。けれども、そのせわしいあいだにも、種痘しゆうとうのことは決し

てわすれず、また博物学の研究をもおこたりませんでした。かの、ほととぎすが、他の鳥の巢すに卵たまごを生んで、その鳥にひなを育てさせるということを観察して、学界に報告したのは、ロンドンから帰つてまもないことでした。それほど、ジェンナーは自然を観察する非凡ひぼんな力をもっていました。それであればこそ、搾乳さくにゅう婦の言葉をきいて、ただちに種痘しゅとう法に思いついたのです。ニュートンがりんごの落ちるのを見て、これはりんごが落ちるのではなく、地球がひつぱるのだろうと考えて、万有引力の法則を発見したように、偉人いじんというものは、なんでもない現象から、おどろく事実を発見するものであります。ですから、おたがいに、この観察力を養成することが、なによりも必要なことであります。

さて、ジェンナーは、いつまでもぐずぐずしては、恩師ハ  
ンター先生に対してももうしわけないと思い、二十九歳さいのとき  
よいよ種痘しゅとうの研究にとりかかりました。研究にとりかかるとい  
つても動物実験などをするものではありません。まず牛痘ぎゅうとうにか  
かった人をたずねだして、その人がはたして、天然痘てんねんとうの流行時  
に、罹病りびょうをまぬかれたかどうかを正確にとりしらべるよりほか  
はないのでした。

だんだんとりしらべるにつれ、いよいよ年来の考えをたしかめ  
るだけでありました。もうこのうへは、実際に人間に牛痘をうへ  
て、実験してみるよりほかはないと思いましたが、さてそれは容  
易のことではありません。人間一人ひとりの生命にかかることですから

粗忽にはできません。かような実験は小児でなくてはできませんが、さて自分には子供がなし、むやみに他人の子をかりてくることもできません。

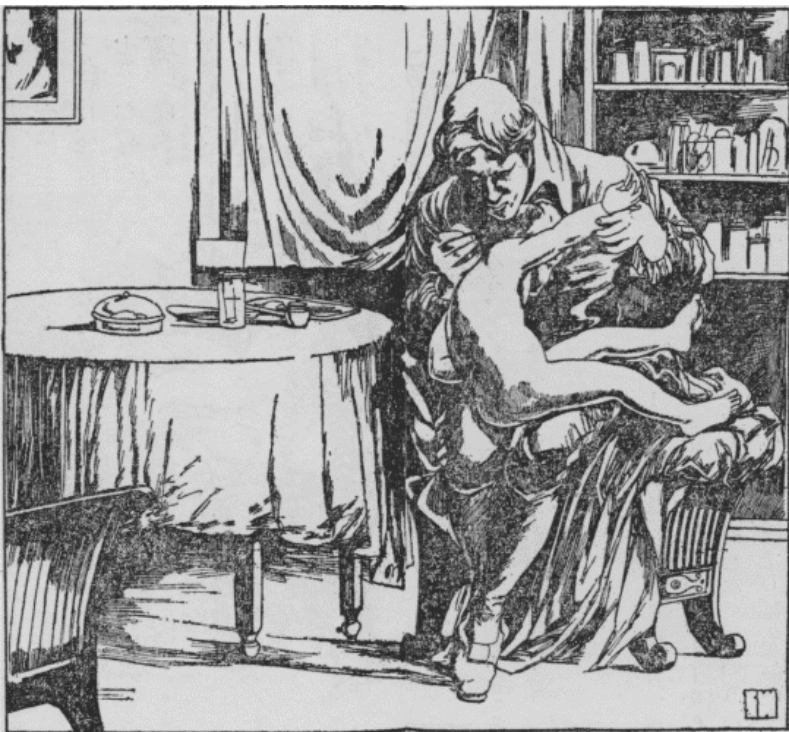
それに、その地方のお医者さんたちは、あいかわらずジエンナーの考えをあざわらつておりましたので、うっかり、他人の子に実験しようものなら、どんなおそろしい非難を受けるかもしれませぬ。

とかくするうちに十年の歳月がすぎました。みなさん十年といえは実にながい年月です。そのあいだのジエンナーの気持ちを考えてみてください。自分の信念はいよいよたしかになるが、いざ実験するとなると大きな困難に面しなければならぬとは、な

んというじれつたいことでしよう。が、時節はきました。その年、すなわち、三十九歳さいのとき、ジェンナーは、あるやさしい婦人とけっこん結婚したのであります。

よくねん翌年の春、ジェンナー夫婦ふうふは男の子をもうけ、エドワードと命名しました。そのときジェンナーはこの子が一定の年ねんれい齢に達したら、実験を試みようとして決心しました。そうして、その子が一年六カ月になつたとき、ジェンナーは、ぶたの疱瘡ほうそうのうみを、その腕にうえたのであります。

なぜ、かれがぶたの疱瘡ほうそうをうえたかと申しますと、かれは人間の疱瘡も、牛の疱瘡も、ぶたの疱瘡も、病原はにかよつたものだと考えたからであります。おそらく、そのとき、牛の疱瘡のう



みを得ることができなかつたのでしよう。そうして一日も早く自  
 分の信念をたしかめたかつたのでしよう。わが子の生命に関する  
 重大な実験をもあえてしたかれの悲壯な気持ひそうちは察するにあまり  
 ありません。まかりまちがえば最愛のわが子を殺すことになります。  
 それにもかかわらずわが子で実験しようとしたのは、かれの信念  
 が岩のごとくかたかつたことがわかります。一日も早く人類が救  
 いたいという心は、ついにわが子の実験となつたのであります。  
 エドワードにぶたの瘡瘡ほうそうのうみをうえると八日目にできもの  
 が生じました。そこでかれは天然痘てんねんとうのうみをうえましたが、エ  
 ドワードは天然痘にかかりませんでした。

その二年の後、ジェンナーはエドワードにまたまた人間の瘡ほうそ



瘡うのうみをうえました。すると十日間にふくれあがってきましたからジエンナーは大いにおどろきました。幸ひろいに拈ひがらずにすみました。それからその翌よくねん年、いま一度人間の瘡瘡ほうそうをうえました。が、少し水ぶくれのようなものができただけで、エドワードは天然痘にはかかりませんでした。

これによつて、ジエンナーはとにもかくにも自分の信念をたしかめました。もとよりまだ十分とはいえません。牛痘ぎゆうとうにかかった人のうみを他の人間にうつして実験しなければ、確実に自分の考えを証拠しょうこ立てたとはいえませんから、なんとかしてその実験をする機会はないかと、辛抱しんぼうに辛抱をかさねて待ちました。その間、医師たちの反対意見などが発表されて、ジエンナーは少

なからず、気をもみましたが、かれの信念はますます堅くなるだけでありました。

ついに時節は到来とうらいしました。かれが四十七歳さいのときすなわち

西曆せいれき一七九六年のことです、数えてみれば研究にとりかかって

二十年近くの歳さい月げつを経ましたが、その年の春ごろから天然痘てんねんとう

が流行しましたので、いよいよ最後の実験にとりかかろうと決心

し、最初にだれにうえるべきか、適当な小児しょうにを物色しました。

わが子のエドワードはもはや実験には役にたちませんので、付近

の少年のうちからさがしだそうとすると、幸いにもジエームス・

フィツプスという八歳さいの少年を得たのであります。ちようどその

とき、サラ・ネルムスという搾乳婦さくにゅうふが、牛痘ぎゆうとうに感染かんせんして

おりましたので、その女のうみをジエームス少年にうえることにしました。

五月十四日！ この日は人類の永遠に記念すべきとうとい日です。この日にジエンナーは実験をこころみることになりました。その日ジエンナーは朝早く起きて、神様に祈いのりました。牧師の家に生まれましたから、小さい時分から祈りにはなれておりましたが、その朝ほど心の奥おくそこ底から祈ったことはいままでにありませんでした。最初考えたときから約三十年、とちゅうでわが最愛の子に実験して、いよいよ確信を得たえというものの、もしまちがえば他ひ人とさまの子を犠ぎせい牲にしなければなりませんから、そのときのジエンナーの祈りこそは純じゆんすい粋すいなものであつたにちがいません。

高まる心臓しんぞうの鼓動こどうをおさえつけながら、ジェンナーはついに、  
 搾乳婦さくにゆうふから取ってきたうみを、ジェームス少年にうえたのであ  
 ります。

少年はあくる日からかゆみをおぼえ、二、三日の後その部が化か  
 膿のうしました。そうして日を経るにしたがつてかわいてゆきました。

これは勿論もちろんジェンナーの予期したとおりでしたが、さてこれか  
 らが大問題です。すなわちこの少年に天然痘患者てんねんとうかんじやのうみをう  
 えても、もはや天然痘にはかからぬことをたしかめねばなりません。  
 ン。

とかくするうち、少年の腕うでのできものはすつかりかわきました  
 が、ジェンナーは、おいそれと第二の実験にはかかり得ませんで

した。が、ぐずぐずしてはならぬので、ついに七月一日に天然痘患者のうみを取つてうえたのであります。

その当座とうざのジエンナーの心配はみなさんに察することができましよう。いまにもジエームスがおそろしい熱をだしはしないかと気が気でありませんでしたが、二日をすぎ三日をすぎ、一週間を経てもなんともなく、ついにジエームスは天然痘てんねんとうにかからなかつたのであります。

読者諸君どくしゃしよくん！　かくてジエンナーの考えは完全に証明しょうめいさ

れたのであります。そのときのジエンナーの喜びはどんなだつたでしょう。ここに、人類が永遠に救われる基礎きそができたのであります。かれの郷里きょうりでは、いま年々五月十四日に種痘祭がおこな

われるのであります。

## 五

この実験に力を得て、その後二年間に二十三回同じような実験をくりかえし、いよいよ牛ぎゆうとう痘をうえれば、天然痘にかからぬということがわかったので、これを書物に書いて学界に報告したのであります。その中には次男のロバートにほどこした実験も書かれてありました。

ところがこの報告を読んだ人たちは、感心すると思いのほか、かえってあざわらいました。「牛痘をうえるのは人間を牛あつか

いにする事だ、けしからぬ」「牛痘をうえると、その子は牛のような顔になって、モーモーとなく」というようなことをいふらすものもありました。そうしてわざわざ手紙を送って、ジェンナーにくつてかかる者もありました。

けれどもジェンナーは、じつと辛抱しんぼうして、なおも実験をかさ

ね、そのうちには、世人がみとめてくれるであろうと確信しました。ただかれのかなしかったことは、かれを激励げきれいしてくれた恩師ハンターがその五年前に死んだことです。恩師が生きておられたらまっ先に賛成してくださったろうにとさびしい思いをしたのであります。

けれども、正しいものはついに勝ちます。かれの種痘法しゅとうほうは、

欧州諸国およびアメリカで採用さいようされて、その説の正しいこと  
 とがたしかめられました。さあ、そうになると、本国では、じつと  
 してはおられません。議会は、一八〇二年と一八〇七年の二回に、  
 約二十万円の金を提ていきよう供して、ジェンナーに実験費としてあた  
 えることになりました。そうして一八二三年かれが死ぬまでには、  
 かれの説は不ふきゆう朽のものとしてみとめられ、かれは大満足のうち  
 に、瞑めいもく目したのであります。

種痘法が日本へ輸入されたのは一八四九年すなわち嘉永二年かえいの  
 ことでありまして、それ以後日本国民もジェンナーの恩恵おんけいに浴  
 することになったのであります。げに偉大いだいなるものは人の力では  
 ありませんか。



(昭和三年五月号)



# 青空文庫情報

底本：「少年倶楽部名作選<sup>3</sup> 少年詩・童謡ほか」講談社

1966（昭和41）年12月17日発行

底本の親本：「少年倶楽部」講談社

1928（昭和3）年5月号

初出：「少年倶楽部」講談社

1928（昭和3）年5月号

※渡部審也（1875（明治8）年～1950（昭和25）年）の挿絵を同梱しました。

入力…sogo

校正・・noriko saito

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ジェンナー伝

小酒井不木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>